

令和3～6年度実践研究最終報告書

長期自然体験活動がもたらす成長と変容

— 「ASO 一周 100km チャレンジキャンプ」の実践と考察 —



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立阿蘇青少年交流の家

連携・協力：熊本大学教育学部

長期自然体験活動がもたらす成長と変容
－ 「ASO一周100kmチャレンジキャンプ」の実践と考察 －

1 はじめに

国立阿蘇青少年交流の家では、令和3年度から熊本大学教育学部の山城¹と連携し、地域の特色や施設の強みを生かした実践研究として「ASO一周100kmチャレンジキャンプ」を実施してきた。今年度で4年目の取組となる。

これまでの取組を通じ、本事業の目的である「参加者の遂行力の涵養・自立的行動習慣の育成」の達成及び、山城と協力して実施した効果測定及び分析からも本事業の有用性を確かめることができた。

そこで、本稿では、本事業において実施した各種調査結果に見られる参加者の変容や成長を整理し、体験活動の価値や重要性を明らかにする。

2 事業の概要

「ASO一周100kmチャレンジキャンプ」は、毎年夏に小学生から中学生が寝食を共にしながら阿蘇地域100kmを踏破するものである。年次によってコースや実施時期は多少異なるが、内容に大きな差異はない。年次ごとの主な日程や行程等は次のとおりである。

2.1 令和3年度

事業名：阿蘇山一周100kmチャレンジキャンプ ～大草原からの贈り物～

日程：8月8日(日)～8月14日(土)

参加者：小学生16名 中学生8名

ボランティア：法人ボランティア3名 大学教育実習・演習生等4名

事前説明会：8月1日(日) 10:00～12:00

行程：1日目 ＜9.5km＞ 本所(開会式)－阿蘇神社－国造神社

2日目 ＜16.3km＞ 大観峰－木落牧野入口－国造神社

3日目 ＜25.3km＞ ふれあい水辺公園－米塚下地

4日目 ＜18.9km＞ 米塚下地－草千里－温泉センター瑠璃

5日目 ＜12.0km＞ ふれあい水辺公園－本所

6日目 ＜18.0km＞ 本所(荒天のため所内にて活動)

7日目 ＜00.0km＞ 本所(閉会式)

※計画では、全日程野外での活動だったが、荒天のため一部変更して実施した。

2.2 令和4年度

事業名：阿蘇山一周100kmチャレンジキャンプ ～大草原からの贈り物～

日程：8月7日(日)～8月13日(土)

参加者：小学生15名 中学生8名

ボランティア：法人ボランティア5名

事前説明会：7月31日(日) 9:30～12:30

行程：1日目 ＜10.4km＞ 本所(開会式)－阿蘇神社－小嵐山公園

¹ 山城千秋(2024) 熊本大学教育学部/熊本大学大学院教育学研究科 教授

- 2日目 <17.7km> ふれあい水辺公園－大観峰－小嵐山公園
- 3日目 <19.1km> ふれあい水辺公園－新阿蘇大橋－あざみヶ池公園
- 4日目 <23.8km> 米塚下園地－草千里－南阿蘇西小
- 5日目 <16.4km> 南阿蘇西小－明神池公園－月廻温泉
- 6日目 <19.0km> 月廻公園－日ノ尾峠－本所
- 7日目 <00.0km> 本所(閉会式)

2.3 令和5年度

事業名：ASO 一周 100km チャレンジキャンプ²

日程：8月6日(日)～8月12日(土)

参加者：小学生14名 中学生8名

ボランティア：法人ボランティア5名 大学研究・演習生等5名

事前説明会：7月30日(日) 9:30～12:30

- 行程：1日目 <10.4km> 本所(開会式)－阿蘇神社－小嵐山公園
- 2日目 <18.0km> ふれあい水辺公園－大観峰－木落牧野入口－小嵐山
- 3日目 <19.0km> ふれあい水辺公園－産神社－あざみヶ池公園
- 4日目 <3.0km> 本所(荒天のため所内にて活動)
- 5日目 <18.0km> 牧場展望所－明神池公園－白水小
- 6日目 <18.0km> 白水小－高森駅－鍋の平
- 7日目 <14.0km> 鍋の平－日ノ尾峠－本所(閉会式)

※計画では、全日程野外での活動だったが、台風による荒天のため一部変更して実施した。

2.4 令和6年度

事業名：ASO 一周 100km チャレンジキャンプ

日程：8月18日(日)～8月24日(土)

参加者：小学生12名 中学生8名

ボランティア：法人ボランティア9名

事前説明会：8月4日(日) 13:00～16:00

- 行程：1日目 <13.3km> 本所(開会式)－阿蘇神社－国造神社
- 2日目 <18.0km> 内牧小－大観峰－小嵐山公園
- 3日目 <15.0km> 市原小－旧宮原線－木塊館－下城の滝
- 4日目 <13.4km> 市原小－千光寺－中原小－押戸石
- 5日目 <12.6km> 米塚－草千里周回－杵島岳周回－中岳火口－火口駐車場
- 6日目 <21.0km> イデア IT カレッジ阿蘇－新阿蘇大橋－白川水源
- 7日目 <15.0km> 鍋の平キャンプ場－本所(閉会式)

3 研究の内容

3.1 研究の視点及び方法

² 令和5年度から名称を若干変更した

本研究では、自然体験活動を通じた子供の行動や意識の変化を把握するため、各種のアンケート調査や記録を行った。また、対象は子供に限らず、一部は保護者にも行った。長期自然体験活動が子供に与える影響については多くの先行研究が存在するが、保護者の思いや考え方の変化に関する知見は依然として不足している。

そこで本研究では、子供の成長や変容に加え、保護者の視点にも注目し、長期自然体験活動が親子双方に及ぼす影響を包括的に検討した。具体的には、事業の開始前と終了後、子供と保護者を対象にアンケートを行い、その意識と実態を明らかにすることを目指した。

令和3年度から令和6年度にかけての4年間で、多岐にわたる調査を実施したが、本稿では単年度で終了した取組や有意な結果が得られなかったものについては言及せず、顕著な成果が得られた調査結果に限定して考察を行う。これにより、長期自然体験活動が親子双方に及ぼす影響を明確化し、その意義や課題をより深く検討することを目指す。

また、本事業にはボランティアも積極的に関与し、子供たちと深く関わる場面が多く見られた。その結果、ボランティア自身も事業を通じた意識の変容や自己の成長を実感する様子がうかがえた。本研究では、これらのボランティアの変化についても取り上げ、事業全体の多面的な影響の一端を示すこととする。

3.1.1 子供と保護者の事業前・事業後アンケート(令和5～6年度実施)

3.1.1.1 子供の変容に対する追跡調査

本事業が参加者である子供にどのような影響を及ぼすかを明らかにするために、事業開始前と事業終了後に次のアンケートを子供(表1)と保護者(表2)の双方に行った。

表1 子供を対象としたアンケート

今のあなたについて教えてください

① 自分のことは自分でできる・している	⑧ 自分から進んであいさつをすることができる
② 自分の意見を言うことができる	⑨ 家の手伝いをする
③ 自ら進んで行動できる	⑩ 最後までやりとげることができる
④ 友達とコミュニケーションをとることができる	⑪ 自分自身のことが好きだ
⑤ 周りの人のことを考えることができる	⑫ 自分自身に、自信を持っている
⑥ 様々なことに興味・関心をもっている	⑬ 自分の長所や短所を分かっている
⑦ 時間を守ることができる	⑭ 「ありがとう」や「ごめなさい」がきちんと言える

表2 保護者を対象としたアンケート

次のことについて回答者から見た子供の姿を教えてください。

① 子供は、自分のことは自分でできる・している	⑧ 子供は、進んで挨拶をすることができる
② 子供は、自分の意見を言うことができる	⑨ 子供は、家の手伝いをする
③ 子供は、自ら進んで行動できる	⑩ 子供は、最後までやり遂げることができる
④ 子供は、友達とコミュニケーションをとることができる	⑪ 子供は、自分自身のことが好きだ
⑤ 子供は、周りの人のことを考えることができる	⑫ 子供は、自分自身に「自信」を持っている
⑥ 子供は、様々なことに興味・関心をもっている	⑬ 子供は、自分の長所や短所を分かっている
⑦ 子供は、時間を守ることができる	⑭ 子供は、人に「ありがとう」「ごめんなさい」が言える

子供を対象としたアンケートは、事業への参加が日常生活における行動や他者とのかかわり、自己

認知へどのような影響を及ぼすかとらえる内容となっている。保護者を対象としたアンケートも保護者から見た子供の姿ではあるが、各項目が対応し、同様の内容を問うものとなっている。

アンケートの実施時期は、事業開始の約2週間前、事業終了の1か月後、及び事業終了の三か月後とし、時系列的に事業参加の影響を測定した。これにより、事業が子供や保護者に与えた短期的な変化だけでなく、その効果が持続しているかについても追跡した。

回答は「4:あてはまる→3:少しあてはまる→2:あまりあてはまらない→1:あてはまらない」の4段階とした。

3.1.1.2 保護者の変容に対する追跡調査

本事業が親子のかかわり方や互いに対する見方にどのような影響を及ぼすかも調査した。表3は子供から見た保護者のかかわり方について、表4は保護者自身による子供のかかわり方についての設問である。表1・2のアンケートと同じく、これらのアンケートも各項目の内容が対応している。回答方法、実施時期についても同様である。

表3 子供を対象としたアンケート

おうちの人（お父さんやお母さんなど）について教えてください

① おうち的人是、あなたの普段の生活や学校での様子を知っている	⑧ おうち的人是、あなたが良いことをした時に、ほめてくれる
② おうち的人是、あなたの仲の良い友達を知っている	⑨ おうち的人是、あなたが悪いことをした時に、叱ってくれる
③ おうち的人是、あなたの勉強や宿題をみてる	⑩ おうち的人是、あなたが困っていたら助けてくれる
④ おうち的人是、あなたのテストの結果をきいてくれる	⑪ おうち的人是、あなたの悩みを聞いてくれる
⑤ おうち的人是、学校の授業参観などの行事によく来てくれる	⑫ おうち的人是、あなたを甘やかすことが多い
⑥ おうち的人是、あなたの話をよく聞いてくれる	⑬ おうち的人是、あなたを放っておくことが多い
⑦ おうち的人是、あなたが手伝いなどをした時に「ありがとう」と言ってくれる	⑭ おうち的人是、あなたの考えや思いを大事にしてくれる
	⑮ おうち的人是、あなたの“やりたいこと”などを応援してくれる

表4 保護者を対象としたアンケート

次のことについて、どの程度あてはまりますか。

① 子供の普段の生活の様子を知っている	⑧ 子供が良いことをした際には、ほめてあげる
② 子供の仲の良い友達を知っている	⑨ 子供が悪いことをした際には、きちんと叱る
③ 子供の勉強や宿題をみる	⑩ 子供が困っていれば、助けてあげる
④ 子供のテストの結果をきく	⑪ 子供の悩みを聞いてあげる
⑤ 学校の授業参観などの行事によく参加する	⑫ 子供を甘やかすことが多い
⑥ 子供の話をよく聞いている	⑬ 子供を放っておくことが多い
⑦ 子供が家の手伝いなどをした際に、ありがとうと言う	⑭ 子供の意思を尊重する
	⑮ 子供のやりたいことなどを応援する・後押しする

3.1.2 子供の事業期間中の毎日の振り返り（令和4～6年度実施）

事業期間中は、毎日の活動終了時に表5の振り返りを実施した。

本評価項目は、国立能登青少年交流の家³が追究した「やり遂げる力」を支える三つの機能の変容を測定する内容を参考に、本事業の特性に合わせて再構成したものである。

表5 毎日の振り返り

自己決定	1 進んで友達やスタッフに話すことができたか
	2 指示されたことだけでなく、自分で考えて行動することができたか
	3 つらいときにこそ、力をふりしぼってがんばることができたか
自己有用感	4 自分の良いところを見つけることができたか
	5 チームの中で自分が役立っていることを感じることもできたか
	6 まわりの友達から支えられていることを感じることもできたか
共感的な人間関係	7 お互いに励まし合って活動に取り組むことができたか
	8 友達の良いところを見つけたり、感じたりすることができたか
	9 友達の気持ちを考えながら話を聞いたり、行動したりすることができたか

評価は、「自己決定」「自己存在感」「共感的人間関係」の上位指標に対してそれぞれ3項目、計9項目設定し、対する尺度を「あてはまる ◎→○→△→× あてはまらない」の4段階で実施した。ただし、分析時は、◎を4点～×を1点と数値化して処理している。

なお、各項目の上位指標である「自己決定」「自己存在感」「共感的人間関係」は、文部科学省「生徒指導提要⁴」で示されている自己指導能力獲得に際する実践上の視点「自己決定の場の提供」「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」と同義のものとして位置付ける。

3.1.3 ボランティアの事業終了時における振り返り（令和3～6年度実施）

本事業には、毎年、高校生や大学生数名がボランティアとして参加し、協力している。具体的な活動内容としては、子供たちのグループに所属し、その活動を支援・指導することや、運営スタッフの一員として職員を補助することが挙げられる。

ボランティアはあくまで、本事業の主体である子供たちを補助する立場にある。しかし、7日間にわたる活動の終了時には、多くのボランティアが子供たちと感動を共有し、感極まる姿を見せる場面が見受けられる。このような情動の高まりを伴う活動において、ボランティア自身にも何らかの影響が及ぼされている可能性が考えられる。

そこで、本事業がボランティアにどのような影響を与えたかを明らかにするため、事業最終日に実施される振り返りを分析する。本事業の振り返りの観点や形式は年度によって異なるが、その中から顕著な事例を取り上げ、検討を進めたいと考える。

3.2 調査結果及びその考察

3.2.1 子供と保護者の事業前・事業後アンケート（令和5～6年度実施）

3.2.1.1 子供の変容に対する追跡調査の結果

表6は、事業前と事業後において、子供の行動がどのように変容したかを、子供自身および保護者に問うたアンケート結果のまとめである。各項目の数値は、「4:あてはまる→3:少しあてはまる→2:あ

³ 国立能登青少年交流の家(2018) 石川縦断キャンプ ACTIVE2018「自己肯定感を高め、主体的に生き抜く子供の育成」を目指した取組

⁴ 文部科学省（2022） 生徒指導提要(改定版)

まりあてはまらない→1:あてはまらない」で評価された回答を平均化して示したものである。また、表中の一か月後および三か月後の（ ）内の数値は、事業開始前との差を表している。なお、各項目

表6 子供の変容の追跡調査の結果

番	設問	事業前	一か月後	三か月後
①	自分のことは自分でできる・している 子供は、自分のことは自分でできる・している	3.28 3.24	3.42 (+0.13) 3.41 (+0.18)	3.44 (+0.16) 3.51 (+0.27)
②	自分の意見を言うことができる 子供は、自分の意見を言うことができる	3.21 3.13	3.67 (+0.46) 3.40 (+0.27)	3.50 (+0.29) 3.54 (+0.41)
③	自ら進んで行動できる 子供は、自ら進んで行動できる	3.26 2.91	3.61 (+0.35) 3.05 (+0.13)	3.44 (+0.19) 3.28 (+0.36)
④	友達とコミュニケーションをとることができる 子供は、友達とコミュニケーションをとることができる	3.31 3.41	3.81 (+0.50) 3.50 (+0.09)	3.72 (+0.41) 3.59 (+0.18)
⑤	周りの人のことを考えることができる 子供は、周りの人のことを考えることができる	3.44 3.13	3.61 (+0.18) 3.24 (+0.11)	3.67 (+0.23) 3.35 (+0.22)
⑥	様々なことに興味・関心をもっている 子供は、様々なことに興味・関心をもっている	3.51 3.52	3.81 (+0.29) 3.57 (+0.05)	3.75 (+0.24) 3.62 (+0.10)
⑦	時間を守ることができる 子供は、時間を守ることができる	3.21 3.00	3.33 (+0.13) 3.10 (+0.10)	3.36 (+0.16) 3.24 (+0.24)
⑧	自分から進んであいさつをすることができる 子供は、進んで挨拶をすることができる	3.56 2.89	3.64 (+0.07) 3.12 (+0.23)	3.61 (+0.05) 3.22 (+0.32)
⑨	家の手伝いをする 子供は、家の手伝いをする	3.31 2.85	3.22 (-0.09) 3.07 (+0.22)	3.22 (-0.09) 3.03 (+0.18)
⑩	最後までやりとげることができる 子供は、最後までやり遂げることができる	3.36 3.09	3.56 (+0.20) 3.31 (+0.22)	3.53 (+0.17) 3.27 (+0.18)
⑪	自分自身のことが好きだ 子供は、自分自身のことが好きだ	3.00 3.07	3.50 (+0.50) 3.31 (+0.24)	3.31 (+0.31) 3.38 (+0.31)
⑫	自分自身に、自信を持っている 子供は、自分自身に「自信」を持っている	3.10 2.70	3.28 (+0.18) 3.17 (+0.47)	3.19 (+0.09) 3.14 (+0.44)
⑬	自分の長所や短所を分かっている 子供は、自分の長所や短所を分かっている	3.23 2.70	3.47 (+0.24) 2.93 (+0.23)	3.42 (+0.19) 3.03 (+0.33)
⑭	「ありがとう」や「ごめなさい」がきちんと言える 子供は、人に「ありがとう」「ごめなさい」が言える	3.51 3.07	3.64 (+0.13) 3.31 (+0.24)	3.53 (+0.01) 3.43 (+0.37)

実施時期：令和5・6年度事業実施約2週間前、事業終了後一か月後、事業終了三か月後対象：参加者42人(上段)、保護者42人(下段)

の上段は参加した子供の回答、下段はその保護者の回答結果である。

多くの項目において、一か月後の評価が事業前よりも向上していることが確認された。このことから、本事業で実施したさまざまな活動が、子供と保護者双方に前向きな影響を及ぼしたと言える。また、三か月後の評価結果においても、一か月後に向上した数値が大きく低下することはなく、むしろ安定的に維持されている項目が多く見られた。このことは、事業の効果が一過性のものにとどまらず、持続的に良い影響を与えていることを示唆している。

三か月後時点の子供の結果を項目別に見ると「④ 友達とコミュニケーションをとることができる」が+0.41ptと顕著に上昇している。この上昇は、グループ活動や共同生活を通じて他者との関わり方を学ぶ機会が多かったことが大きな要因であると推測される。また、本事業では、困難な状況を仲間と協力して乗り越える必要があり、その過程でコミュニケーションの機会が生まれたことも一因と考えられる。関連して、「② 自分の意見を言うことができる」の+0.29pt（一か月後時点は+0.46pt）の上昇も、これらのコミュニケーションの促進が寄与した結果であると考えられる。

「⑪ 自分自身のことが好きだ」も上昇が0.3pt近く見られた。本事業では、普段の生活とは異なる挑戦的な場面や新しい体験が多く提供される。そして、これらの体験を通じて、子供は自分自身の能力を再認識、自己肯定感を強化し、「自分自身のことが好きだ」という意識を高めたのではないだろうか。

一方で、自己肯定感の高まりに関係すると思われる「⑫ 自分自身に自信を持っている」には目立

った上昇が見られなかった。事業前の初期値が低いにもかかわらず、三か月後も依然として低いままである。この結果は、自己評価が厳しく、自信を持つことに抵抗がある可能性や、事業期間中に積み重ねられた自己肯定感が自信の獲得にまで結びつかなかった可能性が考えられる。しかし、保護者の「⑫ 子供は自分自身に『自信』を持っている」という回答では、三か月後に+0.44ポイントと非常に高い上昇が確認された。このことから、子供自身が自信を獲得しているにもかかわらず、その変化を自覚できていない可能性も示唆される。

このような子供と保護者の評価の乖離は、項目⑫に限らず他の項目にも散見される。多くの項目で、子供の回答は三か月目に評価が低下する傾向が見られる一方、保護者の回答は一か月目に比べて三か月目に良好な結果を示すケースが多い。この三か月目における評価の差異は、成長に対する実感の違いによるものと考えられる。子供は、自己評価が具体的な成果や失敗に影響されやすいのに対し、保護者はより広い視点から子供の成長を捉えているため、両者の認識が異なる可能性がある。また、日常生活に戻ることで、事業中に得た新しい能力や自信が常態化し、特別な感覚として認知できなくなった可能性も考えられる。さらに、自然体験活動中は成果が目に見えやすい環境であったのに対し、日常生活ではその成果を実感しにくい点も評価の低下に影響していると思われる。

3.2.1.2 保護者の変容に対する追跡調査の結果

表7は、本事業が親子のかかわり方や互いに対する見方にどのような影響を及ぼすか子供と保護者に問うた結果のまとめである。各項目の上段が子供による回答結果、下段が保護者による回答結果、数値は4段階評価の平均値である（前節3.2.1.1の結果と同様の構成）。

表7 保護者の変容の追跡調査の結果

番	設問	事業前	一か月後	三か月後
①	おうちの人は、あなたの普段の生活や学校での様子を知っている 子供の普段の生活の様子を知っている	3.49	3.53 (+0.04)	3.43 (-0.06)
		3.50	3.64 (+0.14)	3.70 (+0.20)
②	おうちの人は、あなたの仲の良い友達を知っている 子供の仲の良い友達を知っている	3.67	3.76 (+0.10)	3.63 (-0.04)
		3.37	3.57 (+0.20)	3.54 (+0.17)
③	おうちの人は、あなたの勉強や宿題をみてくれる 子供の勉強や宿題をみる	3.10	3.29 (+0.19)	3.11 (+0.01)
		2.80	2.64 (-0.16)	2.84 (+0.03)
④	おうちの人は、あなたのテストの結果をきいてくれる 子供のテストの結果をさく	3.59	3.65 (+0.06)	3.57 (-0.02)
		3.24	3.29 (+0.04)	3.35 (+0.11)
⑤	おうちの人は、学校の授業参観などの行事によく来てくれる 学校の授業参観などの行事によく参加する	3.69	3.79 (+0.10)	3.69 (-0.01)
		3.54	3.57 (+0.03)	3.65 (+0.11)
⑥	おうちの人は、あなたの話をよく聞いてくれる 子供の話をよく聞いている	3.62	3.68 (+0.06)	3.74 (+0.13)
		3.26	3.48 (+0.22)	3.49 (+0.23)
⑦	おうちの人は、あなたが手伝いなどをした時に「ありがとう」と言ってくれる 子供が家の手伝いなどをした際に、ありがとうと言う	3.64	3.68 (+0.04)	3.57 (-0.07)
		3.43	3.81 (+0.37)	3.70 (+0.27)
⑧	おうちの人は、あなたが良いことをした時に、ほめてくれる 子供が良いことをした際には、ほめてあげる	3.64	3.79 (+0.15)	3.69 (+0.04)
		3.35	3.79 (+0.44)	3.76 (+0.41)
⑨	おうちの人は、あなたが悪いことをした時に、しかってくれる 子供が悪いことをした際には、きちんと叱る	3.79	3.91 (+0.12)	3.86 (+0.06)
		3.54	3.90 (+0.36)	3.86 (+0.32)
⑩	おうちの人は、あなたが困っていたら助けてくれる 子供が困っていれば、助けてあげる	3.59	3.74 (+0.15)	3.69 (+0.10)
		3.48	3.62 (+0.14)	3.54 (+0.06)
⑪	おうちの人は、あなたの悩みを聞いてくれる 子供の悩みを聞いてあげる	3.46	3.56 (+0.10)	3.63 (+0.17)
		3.30	3.48 (+0.17)	3.54 (+0.24)
⑫	おうちの人は、あなたが甘やかすことが多い 子供を甘やかすことが多い	2.69	2.56 (-0.13)	2.51 (-0.18)
		2.48	2.55 (+0.07)	2.46 (-0.02)
⑬	おうちの人は、あなたを放っておくことが多い 子供を放っておくことが多い	2.08	1.79 (-0.28)	1.94 (-0.13)
		2.65	2.57 (-0.08)	2.38 (-0.27)
⑭	おうちの人は、あなたの考えや思いを大事にしてくれる 子供の意思を尊重する	3.56	3.68 (+0.11)	3.60 (+0.04)
		3.20	3.43 (+0.23)	3.54 (+0.34)
⑮	おうちの人は、あなたの“やりたいこと”などを応援してくれる 子供のやりたいことなどを応援する・後押しする	3.62	3.74 (+0.12)	3.74 (+0.13)
		3.59	3.68 (+0.10)	3.81 (+0.22)

実施時期：令和5・6年度事業実施約2週間前、事業終了後一か月後、事業終了三か月後対象：参加者42人(上段)、保護者42人(下段)

多くの項目では顕著な変化が見られなかった。その要因としては、やはり事業の主体が保護者ではなく、子供であったことだと考える。また、保護者の考え方や価値観がこれまでの人生で既に固定されており、子供の事業参加による間接的な影響だけでは大きな変化を引き起こしにくいという点も影響していると推測される。

とは言え、一部の項目では、僅かではあるが、変化の傾向も見られる。「⑧ 子供が良いことをした際には、ほめてあげる」「⑭ 子供の意思を尊重する」「⑨ 子供が悪いことをした際には、きちんと叱る」「⑦ 子供が家の手伝いをした際に、ありがとうと言う」といった項目では、平均値が上昇している。この上昇傾向は、事業後の子供の行動や態度の変化が保護者の意識や行動に影響を与えた結果ではないだろうか。前項で見られたように、子供たちは本事業を通じ、新たな挑戦や課題に直面する中で、自立性や協調性を身につけ、自ら考え行動する力を培った。この成長は保護者にとって大きな刺激となり、子供の行動を評価し、新たな側面を見出す機会が増えたと推察される。

このように、本事業は、子供の成長だけでなく、保護者の子育てに対する価値観や行動にも良好な影響を与えることがうかがえる。特に、子供の行動や内面的成長を通じて、保護者がより子供を支え、尊重する姿勢を持つようになった点は、重要な効果として評価できる。保護者が子供の成長に寄り添い、その成果を認識することは、親子関係のさらなる向上にも寄与すると考えられる。

ただし、保護者自身の評価においては多少の変容が見られたものの、子供による評価(各項目下段)においては、事業後の上昇はほとんど見られなかった。要因を特定することは難しいが、一つの仮説として、子供の保護者に対する評価基準が高まった可能性が考えられる。本事業を通じて子供が成長した結果、自身の視点や期待値が向上し、それに伴って保護者への評価基準が引き上げられたため、事業後の保護者の変化が「以前と変わらない」と認識されたのではないだろうか。

3.2.2 子供の事業期間中の毎日の振り返りの結果（令和4～6年度実施）

表8は、令和4年度から令和6年度に実施された事業期間中（7日間）の、各日の終了時に行われた振り返りの記録を示している。各設問に対する回答は、「あてはまる：4」から「あてはまらない：1」までの4段階で数値化され、その平均値を算出したものである。

1日目（初日）と7日目（最終日）の平均値を比較したところ、期間中に多少の下降は見られるものの、最終的に数値が上昇する傾向が確認された。7日間の活動によって、参加者の人間関係が深まったこと、困難な課題を乗り越えたこと、それらを通じて自分自身と向き合ったことなどが、結果として表出したと考える。

特に、「5. チームの中で自分が役立っていることを感じる事ができたか。」における上昇は約0.6ptと顕著であった。この結果は、本事業がグループを単位とした活動を中心に構成されていることが、その向上に寄与した可能性を示唆している。同様の傾向は、「4. 自分のよいところを見つける事ができたか。」においても確認され、こちらも約0.5ptと高い上昇を示した。ただし、これらの項目は1日目の初期値が低い点を踏まえる必要があり、その点が数値の上昇幅に影響を与えている可能性も考慮したい。

一方で、項目7～9の上昇幅は比較的小さい傾向が見られた。これらの項目は主に他者との関わりに関する内容で構成されており、上述の項目4および5とは対照的に、1日目の初期値が高いことが上昇幅の低さに影響している可能性がある。このことから、事業開始時点で参加者がすでに他者との関わりに一定の自信や肯定感を持っている場合、数値の大幅な上昇は見られにくい傾向があると考え

られる。

表8 毎日の振り返り 項目ごとの平均値

指標	番	設 問 内 容	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目
自己決定	1	進んで友達やスタッフと話すことができたか。	3.49	3.70	3.81	3.83	3.73	3.84	3.86
	2	指示されたことだけでなく、自分で考えて行動することができたか。	3.25	3.52	3.50	3.52	3.58	3.61	3.73
	3	つらいときにこそ、力をふりしぼってがんばることができたか。	3.63	3.76	3.73	3.75	3.77	3.83	3.86
自己存在感	4	自分のよいところを見つけることができたか。	3.03	3.23	3.34	3.25	3.43	3.48	3.52
	5	チームの中で自分が役立っていることを感じることはできたか。	2.97	3.19	3.23	3.29	3.30	3.58	3.56
	6	まわりの友達から支えられていることを感じることはできたか。	3.48	3.73	3.73	3.76	3.81	3.84	3.83
共感的な人間関係	7	お互いに励まし合って活動に取り組むことができたか。	3.57	3.70	3.73	3.70	3.67	3.80	3.89
	8	友達のよいところを見つけたり、感じたりすることができたか。	3.65	3.72	3.76	3.78	3.67	3.83	3.84
	9	友達の気持ちを考えながら話を聞いたり、行動したりすることができたか。	3.54	3.61	3.77	3.70	3.57	3.81	3.78

実施：一日の活動終了時

対象：令和4～6年度事業参加者65名

以上の各項目を指標ごとにまとめたものが表9である。「自己存在感」の初期値は他の指標と比較して際立って低い、最終的には最も高い伸び率を示している。この結果は、本事業が参加者に対し、「自分はここにいてもよい」「自分は必要

表9 毎日の振り返り 指標ごとの平均値

指標	番	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目
自己決定	1～3	3.46	3.66	3.68	3.70	3.69	3.76	3.82
自己存在感	4～6	3.16	3.38	3.44	3.43	3.51	3.64	3.64
共感的な人間関係	7～9	3.59	3.68	3.76	3.72	3.63	3.81	3.84

実施：一日の活動終了時

対象：令和4～6年度事業参加者65名

とされている」といった思いを抱かせる機会や場面を多く提供していたといつてよいだろう。

先述のとおり、項目7～9に関連する「共感的な人間関係」においては、初期値が高く、顕著な上昇は見られないものの、7日目時点では最も高い数値を示している。「共感的な人間関係」とは、項目7～9の内容を踏まえつつ、「自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる協力的な人間関係」を指す概念である。この指標は主に他者を理解しようとすることに着目したものであるが、本事業のように目的や目標はある程度共有しつつも、見知らぬ者同士が突発的に集まり、活動を行うイベントに参加できる子供たちは、元来この「共感的な人間関係」に関する能力が高い可能性も示唆される。

3.2.3 ボランティアの事業終了時における振り返りの結果(令和3～6年度実施分から)

事業終了時に実施された振り返りの結果を基に、本事業がボランティアとして参加した高校生・大学生に与えた影響を明らかにする。本振り返りにおけるアンケート項目は、年度ごとに一部異なるため、全項目を網羅的に比較することは困難である。しかし、各年度に共通して実施された「事業を通じて得られた学び」に関する設問に注目し、分析を行った。

以下に、得られた変容を概観し、大まかに分類・整理した結果を示す。

3.2.3.1 自己認識と主体性の向上

ボランティア活動における自己認識の深化および主体性の向上は、多くの参加者の振り返りから明確に読み取ることができる。活動を通じて、参加者は自らの立場や役割を再認識し、それを遂行する過程で成長を遂げている。

例えば、

「自分自身がどうなりたいのかを見つめ直すきっかけになり、そのために今の自分に足りないものを見つけた。」

という記述は、活動が自己を内省する機会を提供し、自己の課題を認識する力を養う場となったことを示している。また、

「自分に出来ることを!!というふうに考えて、その時の自分自身にできることを行うことが出来ました。」

という記述は、限られたリソースや状況に応じて行動を選択し、自らの力を発揮する能力が育まれたことを示唆している。

これらの振り返りから、参加者は活動を通じて受動的な姿勢から能動的な姿勢へと変化したことが分かる。特に、困難な状況における選択や行動を通じて自らの能力を試し、その結果として自己効力感が高まったことは、多くの参加者の記録に共通して見られる点である。

3.2.3.2 対人関係能力の向上

対人関係能力の向上は、ボランティア活動を通じて得られる最も顕著な成長の一つである。参加者は子供や他のボランティアとの関わりを通じて、実践的にコミュニケーション能力やリーダーシップを学んでいる。

「参加者と密にコミュニケーションをとることができ、小さな成長に気づくことが出来た」

という記述は、活動を通じて共感力や観察力を高めたことを示している。また、

「グループのリーダーとして指示出しなどを行い、まとめ役を担った経験」

は、他者の意見を取り入れつつリーダーシップを発揮する能力が育まれたことを表している。

さらに、

「その場にいる人たちがどのように考え、どういう姿を見せているのかを考えた」

という振り返りからは、自らの役割を果たすだけでなく、周囲の状況や感情に敏感に対応する力が高まったことが分かる。これらの経験は、対人関係スキルの向上にとどまらず、他者を尊重し、多様な価値観を受容する姿勢の育成にも寄与している。

3.2.3.3 教育的視点と観察力の深化

教育的視点の獲得および観察力の深化は、子供との直接的な関わりを通じて特に顕著に見られる成長である。参加者は、子供たちが自己の意見を持ち、成長する過程を見守る中で、教育的な視座を身につけている。

「子供はたった1週間でも格段に成長することができるということ。子供と一対一で関わる時の関わり方を学んだ」

という記述は、子供の潜在的な成長能力を認識し、それを引き出すための方法を学んだことを示している。また、

「子供が自分で考える場面を尊重し、見守る姿勢を持てるようになった」

という記述からは、指導者としての過度な干渉を避け、子供の主体性を尊重する姿勢を形成したことが窺える。

さらに、

「小さな成長を認めることで、自分自身も学びを得ることができた」

という振り返りからは、他者の成長を見守る中で自己の成長を見出す姿勢が育まれたことが分かる。このような学びは、ボランティア活動が単に「教える」場に留まらず、「子供から学ぶ」場として機能していることを示している。

4 研究の成果と課題

これまでに述べた内容を以下に改めて整理し、必要に応じて補足を加えながら成果と課題を明らかにし、それらを踏まえた今後の展望について検討する。

4.1 成果

本事業は、子供に対してコミュニケーション能力や自己肯定感の向上をもたらした。グループ活動や共同生活を通じ、「友達とコミュニケーションをとることができる」や「自分自身のことが好きだ」といった項目での評価が特に向上したことが確認されている。また、これらの成果は一過性に留まらず、事業終了後三か月経過後も安定して維持されていることから、事業の影響が持続的であることが示唆される。事業期間中は、日々僅かながらではあるが、「自己決定」「自己存在感」「共感的な人間関係」の上昇が見られたことから、「生徒指導提要」における自己指導力の向上にも寄与したと考えられる。

保護者に関しては、子供の成長を通じて子供とのかかわり方に対する意識や姿勢に変容が見られた。子供の意思を尊重し、良い行動を積極的に褒める姿勢が強まり、親子間の関係性が向上したことが予想される。この変化は、事業による子供の変容が保護者に与えた影響であると考えられる。また、保護者が子供の成長をより客観的に認識し、肯定的に受け止める姿勢が強まった点は、重要な成果である。

ボランティアとして参加した高校生や大学生は、自己認識や主体性の向上、対人関係能力の強化といった成果を得た。リーダーシップや共感力を育成し、子供たちとの関わりを通じて教育的な視点を深めた点は顕著である。特に、小さな成長を見守る姿勢を学び、他者を尊重しながら指導者としての在り方を模索する経験は、彼らにとって重要な学びとなった。また、活動を通じて自分自身の可能性を見だし、課題解決に向き合う姿勢を強化する契機となった。

4.2 課題

子供の自己肯定感の向上が確認される一方で、「自分自身に自信を持っている」といった自己評価に関する項目では顕著な改善が見られなかった。これは、子供が自己評価において厳格であり、成長や成功を十分に実感できていない可能性を示唆する。また、保護者の評価と子供自身の評価の間に乖

離が見られる点も課題である。特に、保護者が子供の成長を前向きに評価しているにもかかわらず、子供自身がその変化を十分に認識できていないことが挙げられる。日常生活に戻ることによって特別な体験が薄れる現象も、この乖離の一因と考えられる。これらのことから、子供は自身の成長を実感することが困難であると言える。そのため、子供の自己肯定感や自己有用感等の高揚を図るためには、保護者が子供に対し成長への気づきを促したり、価値付けを行ったりするなど、子供の変容に対する積極的なフィードバックが必要ではないだろうか。

保護者自身の価値観や行動の変化は限定的であり、特に子供による保護者の評価において事業後の顕著な改善が確認されなかった。保護者が事業に主体的に関与する機会が少なかったことも、変容が限定的であった一因と考えられる。また、子供の視点や期待値が高まった結果として、保護者の変化が相対的に小さく感じられる可能性も指摘できる。保護者が直接的な活動に参加する仕組みがなかったため、事業の影響を十分に受け止める機会が不足していたことが課題として挙げられる。

ボランティアに関する課題としては、アンケートの記述をもとにした分析が中心であり、定量的な測定が十分に行われていない点が挙げられる。また、定性的な分析についても詳細に掘り下げたとは言えず、結果として、ボランティア活動における具体的な課題を明確にすることが難しい状況である。このため、活動の成果や課題を精確に把握し、それを改善につなげるための基盤整備が必要である点が課題として残されている。

5 研究の補完と総括

調査の結果、「子供の事業参加による間接的な影響だけでは保護者の変容は限定的である」という傾向が示された。これに対して、本事業の実施及び研究に深くかかわった山城（2024）は、別の側面から保護者の内面や変容にアプローチしている。以降の本節は、山城による研究の補完、総括となる。

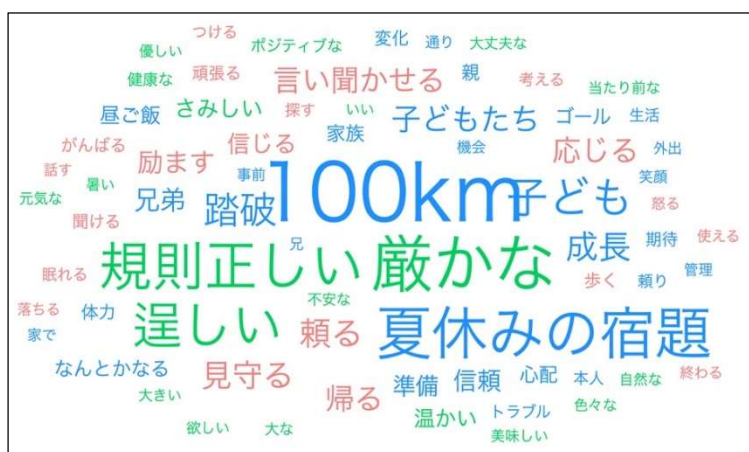
5.1 研究の補完

事前説明会のなかで親の学びプログラムや事業に関するワークショップを実施し、率直な気持ちを保護者同士で話し合う機会を設けた。令和4～6年度に実施し、藤原美里氏⁵が講師を務めた。方法は、子供の班ごとに分かれ、設問に対する現在の思い・考えを率直に書いてもらい、KJ法で共有した。なお、令和4、5年度は設問が共通だったため合わせて分析し、設問の異なる令和6年度は別途分析した。

まず令和4、5年度における保護者から出された言葉をテキストマイニングの手法を用いて分析したところ、以下の結果となった（図1～5）。

図1は「長期自然体験活動に子供を参加させる親の心構え」について聞いたところ、「100km」「規則正しい」「厳かな」「夏休みの宿題」「遅しい」という言葉が目立ち、数も多かった。具体的には

図1 長期体験活動に子供を参加させる親の心構え



⁵ 藤原美里(2024) 熊本県教育委員会委嘱「くまもと『親の学び』プログラムトレーナー」

「100km 踏破がんばってほしい」や「規則正しい生活をさせる」、「夏休みの宿題を終わらせて行ってほしい」、「信じて待つ」といった励ましや心配の声が多く聞かれた。

図2は、「7日間親子が会わないことの意義」を問うた結果である。もっとも多かったのが「子離れ」であり、次いで「ものたりない」「あたり前な」となっている。例としては「子離れ、親離れの機会」、「子離れの準備」、「ものたりなさへの気づき」、「いつも当たり前のように頼ってしまっけど、いつかは親元を離れる。今の当たり前が当たり前でなくなる」のように、1週間を子供不在で過ごすことを子離れの機会と前向きに捉える保護者が一定数露している者など、子供だけでなく保護者にも影響があると思われる。

図3は、「7日間の体験を終えて親が子にできること」とは何かを問うたものである。大多数を占めた言葉は、愛情表現に関するものである。「好きだ」「抱きしめる」「褒める」「ハグ」のように、子供の成長を愛情深く受け止める姿勢が窺える。たとえば、「おかえり、頑張ったね、と笑顔で迎える」、「たくさん褒めて美味しい大好きな料理をつくって待つ」などのように、家族で子供の努力を褒めて、体験話に傾聴するという態度である。

事業終了後の追跡調査では、子供や保護者の態度に大きな変化は見られない結果となっているが、事業前のワークショップでは、保護者の率直な不安や希望が言葉として表されており、それが個人の課題から全体の課題として思いを共有できたことは、事業が始まった後の安心感、期待感に繋がっていたのではないかとと思われる。

図4 本事業に参加するにあたっての期待感

つぎに、令和6年度のテキストマイニングによる分析結果である。図4は、本事業に参加するにあたっての期待感について尋ねたものである。本事業に期待が大きい学びとしては「助け合う」「やり遂げる」「我慢強い」「成功体験」である。

図2 7日間親子が会わないことの意義

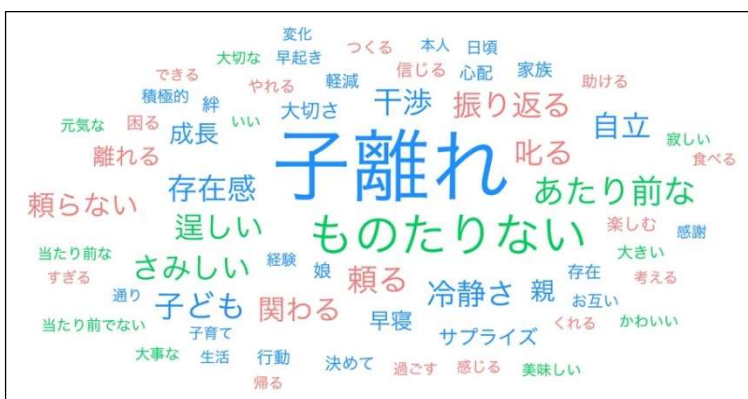


図3 7日間の体験を終えて親が子にできること

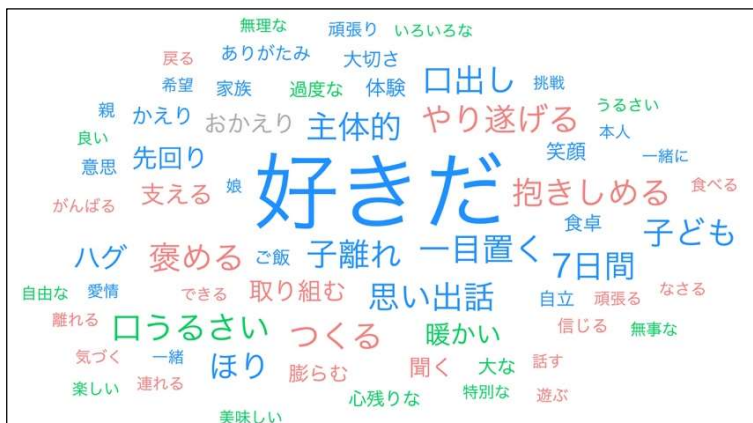
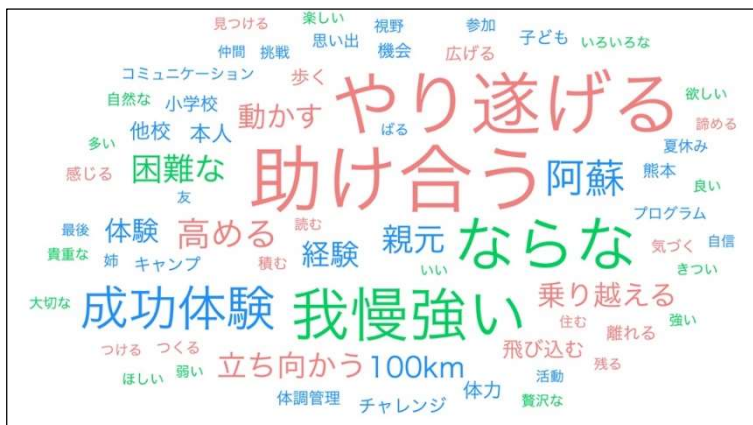


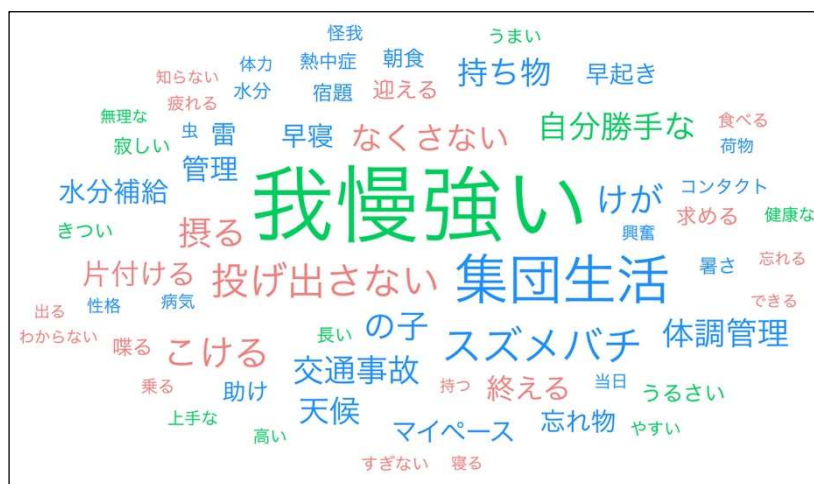
図4 本事業に参加するにあたっての期待感



う。いずれの体験も学校教育だけでは獲得することが難しいもので、本事業がめざすところである。具体的には「チームワークの大切さを知ってほしい」、「仲間との助け合い・協力」、「困難なことにチャレンジしてほしい」、「チャレンジと成功体験。失敗もまたよし」といった言葉から、保護者の期待が伝わる。

最後の図5は、本事業に参加するにあたっての不安感を示したものである。7日間という長期にわたる自然体験活動とキャンプ生活は、日頃の生活では体験できないものである。そのため、不安も多くなる。保護者が子供に対して不安と思っていることは、途中で投げ出さず、我慢強く最後まで歩けるか、という点にある。「我慢強い」「集団生活」「投げ出さない」にその不安感が表れてい

図5 「本事業への不安感」のテキストマイニングの結果



る。たとえば「途中で投げ出さないか」、「早起きができるか」、「体力が持つのか」、「水分補給をうまくできるか」、「長い集団生活をちゃんと送れるか」、「知らない場所で寝られるか」などが挙げられる。

保護者の不安感は、当然ながら子供自身にも共通するものである。その不安感は、7日間の様々な自然と人との触れ合いや体験を通して深く学ぶことによって、子供たちの成功体験に変わるのである。本事業は、ジョン・デューイの述べる「なすことによって学ぶ」ことが、意図的・無意図的に埋め込まれている。100kmを歩くという当初の個人の目標は、体験を重ねるなかで、みんなの目標となり、前出の図4で示した期待感が現実のものになっている。それは、本事業の結果が示すところである。

5.2 研究の総括

以上から、本事業は、子供、保護者、ボランティアとしてかかわった高校生・大学生の成長や変容に一定の寄与があったと言える。ただし、本研究は統計的側面において、データの量、測定方法など不十分な点も多いため、一般化して多方面に展開するためには、さらなる調査分析が必要である。

最後に、補論も含めた本事業の意義と今後の展望を示す。

第一に、子供の体験を豊かにするためには、大人の体験も同時に考える必要があるということである。現代の子供たちは、大人と同じように簡単・便利で消費する生活を享受する一方で、生きていく上で必要とされる技能や体験が不足していると言われて久しい。特にコロナ禍では顕著に指摘されたことである。こうした子供の体験不足の問題は、大人の生活にひきずられる子供の問題として解釈すべきであり、大人自身の生活の質も同じく問われなければならない。一方で子供が体験活動の参加の意思を持っていても、保護者の理解不足によって参加できない家庭も少なくない。大人の理解や体験の格差によって、子供の貴重な体験の機会が失われてはならない。前述の保護者のワークショップのなかで「私も子供の時に 10 泊 11 日の無人島キャンプに参加したことがあったので、娘にもキャンプを勧めてみた」というコメントは、子供時代の体験がいかに大切か、その証左となっている。

第二に、多様な他者との出会いが子供たちの変容に寄与していることである。子供たちの日常である学校は、同級生集団による相互作用を前提とし、教育目標や校則によって誰もが同質であることを

求められる。個性を伸長するはずの学校が抑圧となり、同級生という同年齢の人と同じ学力がなければならぬとされる。しかし、私たちが暮らす社会は多様性を有する。本事業は、そうした「小さな社会」を体験する場であり、小学生からボランティアの高校生や大学生、そして、大人が同じ目標の下、見知らぬ他者と共同・協力して達成することをめざす。そのような体験活動を具現化するのが本事業であり、子供たちが日頃話すことの少ない多世代交流を可能としている。調査結果からも明らかに、多様な人々と接することにより、自己を知り、変化としての自己肯定感の向上につながっていると考えられる。

最後に、阿蘇という場が有する教育力である。「100kmを歩く」という魅力的な言葉とは裏腹に、その道程はかなり過酷である。また近年の異常気象による悪天候も多く発生し、安全面において迅速で正確な判断が求められる。それでも阿蘇の雄大な自然と文化が参加者に与える感動は大きく、自然への畏敬の念を抱き、価値観さえも変化させる。100kmを安全に歩くことができるのも、交流の家の職員、スタッフ、ボランティアの専門性に加え、多くの企業や地域団体とのネットワークによって事業が支えられていることを忘れてはならない。また、子供だけでなくボランティアとして参加する高校生、大学生においても、100kmという未知の先行きの見えない体験学習は、与えられたことを粛々とこなす学習とは異なり、自分で答えを見つけなければならないという教育実践を内包する。阿蘇の7日間は、唯一無二の体験を提供してくれるのである。

6 おわりに

これまで述べてきたように、今回の研究において一定の成果を確認することができた。

ただし、その成果を手放して喜ぶのは早計と言える面もある。それは、本研究で得られた成果が、事業内容そのものによるものではなく、参加者やその背景に起因しているのではないかと考えられるからである。

表10は、令和6年度の事業参加者の保護者を対象に実施した子供の体験活動をどの程度重視しているかについての調査結果を示している。この調査では、「5: 重視している」から「1: 重視していない」までの5段階で回答を求め、その平均値を算出した。その結果、保護者の体験活動に対する意識の高さが明らかとなった。たとえ高額な費用が必要であったとしても、子供に体験の機会を与えようとする保護者の姿勢が示された結果といえる。特に、本事業が提供するような自然体験の重視度が非常に高いことが注目される。

表10 子供の体験をどれくらい重視するか

番	項 目	平均
1	自然体験(登山,キャンプ,川遊び,釣り,マリンスポーツ,スキーなど)	4.8
2	社会体験(農業体験,職業体験,ボランティアなど)	4.4
3	文化的体験(動植物園,水族館,博物館,音楽,演劇,スポーツ観戦など)	4.6

実施時期：令和6年度事業開始2週間前 対象：保護者20名

こうした結果から、保護者の養育態度やそうした保護者によって育てられた子供の成育歴が、本事業による成長促進に影響を与えた可能性が示唆される。この点を考慮すると、今後、より多様な背景を持つ子供たちに対して、本事業がどのような影響を与えるのかを明らかにすることが求められる。

ろう。

さらに、表10と同様に実施した家庭における年間の体験活動の有無およびその頻度に関する調査結果を表11に示している。

表11 家庭における年間の体験活動の有無およびその頻度

番	項目	3回以上	2～1回	ほとんどない
1	自然体験	70.0%	20.0%	10.0%
2	社会体験	25.0%	55.0%	20.0%
3	文化的体験	50.0%	45.0%	5.0%

実施時期：令和6年度事業開始2週間前 対象：保護者20名

無作為抽出家庭を対象とした「青少年の体験活動に関する調査研究⁶」にれば、一年間で自然体験の機会がないという家庭が5割を越える。一方で、年間3回以上の自然体験の機会を持つ家庭は2割未満に留まる。本事業の調査結果（表11）と比較すると、両者の間には顕著な差が見られる。すなわち、本事業は広く子供たちに体験の機会を提供し、その成長を促進することを目的として企画・実施されたものの、実際はすでに多くの体験機会をもつ子供たちの参加が主であったと言える。この点から、本事業は一部の層に特化した駆け馬に鞭のような企画になっていたことが分かる。今後は、日常的に体験機会の少ない子供たちにも目を向け、そうした子供たちの参加機会をどのように確保していくかに注力していくことも求められるのではなかろうか。このことは、山城が総括で述べた大人の体験機会の確保・理解促進にも通ずることである。

今後は、これらの課題に対応しながら、活動の意義をさらに高めるための方策を検討する必要がある。また、本研究で得られた知見を基に、同様の体験活動が他の地域や対象においても効果的に展開されることを期待したい。

【参考文献】

- 国立能登青少年交流の家(2018) 石川縦断キャンプ ACTIVE2018「自己肯定感を高め、主体的に生き抜く子供の育成」を目指した取組
- 文部科学省(2022) 生徒指導提要(改定版)
- 株式会社浜銀総合研究所(2021) 令和2年度文部科学省委託調査 令和2年度「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書令
- 文部科学省(2019) 人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について(答申)(中教審第212号)
- 村田 恵美ほか(2012) 子供の野外体験活動の意義と保護者の期待
- 馬場 亜紗子ほか(2004) 組織キャンプ体験が母子関係に与える影響--ソーシャルサポート感の変化に着目して
- 林 幸克(2002) 子供の発達特性に応じた体験活動の実践～「コミュニケーション能力」と「リーダーシップ」に着目した検討～

⁶ 株式会社浜銀総合研究所(2021) 令和2年度文部科学省委託調査 令和2年度「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書令